

## 東濃地方に伝承された地歌舞伎と振付師の活動について



安藤 美雪 ANDO, Miyuki

芸名：松本団女・杵屋勘輪咲・豊澤みゆき

地歌舞伎振付師、地歌舞伎下座、地歌舞伎義太夫三味線方

振付師の松本団升（当時 松本松之助）の次女として生まれ、3歳にて初舞台を踏み、以降、子役として名地出演。歌舞伎の基本、日本舞踊、長唄三味線、琴、太鼓等を習得。父の助手、後見、代役等勤める。平成15年団升師匠引退、松本団女襲名。平成30（2018）年フランスパリ公演、スペインサラマンカ公演。令和2（2020）年岐阜県芸術文化顕彰受賞。現在、岐阜県内歌舞伎保存会10団体振付、恵南歌舞伎音楽教室講師。

団升流松扇会：日本舞踊、長唄三味線講師。芸歴61年、師匠歴20年、218公演、623幕振付け、講演回数25回。

### ABSTRACT

This paper first outlines the history of *kabuki* and *ji-shibai* (amateur *kabuki* performed at local festivals), and then describes the achievements of Dansho Matsumoto VI, who is indispensable in discussing *ji-shibai* (also called *ji-kabuki*) in the Tono region. The paper then touches on the situation of *ji-kabuki* in Gifu Prefecture, where Danjo Matsumoto II is currently active, and then introduces the work and role of a choreographer, including the practice of passing on the traditional performing arts of the region through instruction in children's *kabuki*. *Kabuki* and other traditional performing arts are of great interest, especially in Europe, so that it is quite possible that performances at local traditional theaters will become an inbound tourism resource in the near future.

### 1. はじめに

この度、「東濃地方に伝承された地歌舞伎と振付師の活動について」と題し、恵那市を通して発表の依頼があり、私も恵那市出身であることから、地歌舞伎の発信に一役買えればとの思いから引き受けた。現在、二代目松本団女として活動し、令和4（2022）年の確定申告を済ませたところであるが、職業を地歌舞伎振付師しているのは多治見税務署管内でも私一人とのことである。

地歌舞伎振付師の他に、下座音楽を担当する杵屋勘輪咲、地歌舞伎義太夫の三味線方の修行をして豊澤みゆきの名をいただいた。

現在、地歌舞伎10団体を指導し、1公演で約15日間稽古を行うため、1年の半分は地歌舞伎の稽古、あとの半分は日本舞踊と三味線の稽古をしていることから、ほぼ一年中を着物姿で過ごしている。

### 2. 歌舞伎のはじまり

歌舞伎の始まりは、慶長8（1603）年に戦国時代が終わり、徳川家康が征夷大將軍に任じられて江戸幕府が開かれると、世は平和な時代となった。その直後、出雲の阿国が巫女の舞から「かぶきおどり」を踊って人気を得て、京の町で多くの人々を魅了した。

人と違った不良な格好をした者を「かぶいたもの」と少し揶揄されていたことから、その当時は漢字の「歌舞伎」ではなく、ひらがなで「かぶき」とされていたようである。

出雲の阿国をはじめ「かぶき」は女性の集団であったが、幕府からの制約、禁止令があり、十五歳頃の若衆歌舞伎へと変化していった。その後、若衆歌舞伎も禁止され、大人の野郎歌舞伎へと変化した。男性がカツラを着けて女役をすることから女形ができ、それまで踊りだったものから、起承転結による物語となったことで、野郎歌舞伎は庶民の最大娯楽へと発展し、現在の「歌舞伎」の原型となった。

### 3. 地芝居のはじまり

地歌舞伎については、出雲の阿国から始まり、約100年後の享保元（1716）年頃に、岐阜東濃地方にも伝わり、村祭りにおいて村人自らが演じる「地芝居」が盛んに行われるようになった。三都（江戸、上方、京）で磨かれた歌舞伎は、まちがいなく地方の庶民をもとりこにした。

### 4. 地芝居の推移

江戸時代から昭和の初期頃まで、村々の神社の社殿を舞台に、お客は芝（草）が張られた露天で観覧していたため「芝居」と言われ、「歌舞伎」と言われ始めたのは明治以降である。岐阜県内には客席まで屋根があるしっかりした芝居小屋が多く残っている。人々から最高の娯楽として愛された歌舞伎（芝居）も、戦後の時代の変化により、村芝居として成り立たなくなっていくが、昭和40（1965）年頃から、日本の良さを見直す意識が高まり、地芝居の復活が始まった。

### 5. 六代目 松本団升の功績

岐阜の地歌舞伎を語るうえで「松本団升」は欠かせない人物である。長野県岡谷生まれの父は、先代松本団升一座の子役として3才で初舞台を踏み、その素質を見込まれ、役者として全国を巡業した。その後、東京へ奉公に出ると歌舞伎座にも通い、名優と云われた数々の役者の演技を目に焼き付けた。再び役者として地方を巡るが戦争がはじまり応召。終戦後は、父親の在所である恵那郡遠山村久保原（現在の恵那市山岡町）の青年団からの依頼を受けて、地歌舞伎の振り付け指導を始めた。山岡町には8つの地区があり、それぞれにある神社の神事の余興として青年団が歌舞伎を行っていたことから、各地区からも指導の依頼を受け、更に周辺の岩村や明智からも依頼があった。そのようなことが切っ掛けで山岡に住むことになった。指導の評判は、岐阜県内に留まらず、愛知県、長野県へと広がっていった。

団升の振付芸題は、古典、新作、また途絶えた芸題を復活させるなど、200ほどの作品を持つ。また、子供歌舞伎にも尽力し、各地で講演を重ねながら歌舞伎の魅力を伝え、公演会開催へと導いた。その努力が認められ、山岡町名誉町民、岐阜県重要無形文化財指定、旭日双光章に輝いた。



六代目 松本団升



出演前の最終確認

歌舞伎俳優の三代目 市川猿之助（現在 猿翁）氏が瑞浪市にある相生座を訪れた際に、東京の中央では無くなった型を父が稽古で教えていることを知り、その型を是非自分の演技に取り入れたいと指導の依頼をされた。大歌舞伎の役者はプライドがあり、地方の師匠に習うことは滅多に

無く、指導を受けたとしても公表はされない。しかし、猿之助氏は堂々と「団升型」として舞台で発表され、本にも書かれ、テレビ番組の特集としても放映されたことで、松本団升が一躍注目されることになった。その後も猿之助氏との親交は続き、御縁もあって、父のところに習いに来ていた中津川市の坂下歌舞伎保存会の少年が、現在、三代目 市川笑三郎氏（中津川観光大使）として市川猿之助歌舞伎で活躍している。

また、団升の孫で私の甥は、幼少より地歌舞伎を習いはじめ、その魅力から歌舞伎の道に進むことを決意し、平成 12（2000）年に国立劇場第 15 期歌舞伎俳優研修を終了後、五代目 中村勘九郎（十八代目 中村勘三郎）氏に入門し、中村いてう（恵那観光大使）の芸名で歌舞伎俳優として舞台に立ち、今では中村屋の殺陣師として重要な役職を担っている。



中村いてう

## 6. 岐阜の地歌舞伎

全国には 200 ほどの歌舞伎保存会があり、そのうち 30 団体が岐阜県に集中していることから、日本一地歌舞伎が盛んな地域と云われている。この理由として、岐阜県には海がないことから、祭りで自ら芝居を演じることが庶民の楽しみの一つであったからではないかと云われている。県内でも特に東濃地方の恵那市と中津川市で多くの保存会が活動し、今もなお各地域で地歌舞伎が大切に受け継がれている。

また岐阜県内には村の奉納歌舞伎のために造られた芝居小屋が今も多く残り、文化財に指定されているものなど、全国に誇れるような立派な芝居小屋もある。その多くは、地元の方々によって今も大切に保存されている。

岐阜県の地歌舞伎は盛んなように思われるが、どこも高齢化による後継者不足に加えて、今回のコロナウイルス感染症により、どの団体も元気を失ったように感じられる。

コロナ禍で 2 年ほど活動が制限され、公演なども中止を余儀なくされたが、岐阜県や市町の後押しもあり、徐々に地域の公演会の開催も決定するなど活動が再開されはじめ、令和 5（2023）年 1 月からは公演会に向けた稽古の予定が埋まってきている。

## 7. 松本団女としての活動

私は、現在、二代目松本団女として地歌舞伎の振付指導にあたっている。振付師としての役割は、各歌舞伎保存会から依頼を受けると、出し物（芸題）を決め、台本製作、配役、当日までの稽古日程を決める。公演までの約 15 日間を稽古日とし、出演者の所作の指導にあたる。難しい 1 時間以上かかる芝居も 15 日で仕上げる。役者以外の義太夫、三味線、下座方、顔師、床山、着付などの専門家を手配し、地元保存会大道具師と大道具、小道具について決定していく。

公演当日は、開演前の到着の太鼓を打ち、塩で舞台を清める儀式を行う。上演中は、狂言方、ツケ打ちで役者に合図を送り、舞



ツケ打ち

台を盛り上げる。振付師匠としての役目は、歌舞伎の楽しさ、日本の芸能を伝承することである。



三味線



舞台上手の様子

母は元々下座を担当しており、私と娘、孫の4代が下座を継承している。孫も高校生になるが、太鼓や、三味線など稽古をしており、今後も頑張ってくれてくれることを期待したい。

現在指導している団体は表 1 のとおりであるが、指導は保存会だけではなく、小学校、中学校の協力により「子ども歌舞伎」として児童生徒たちに、地域の伝統芸能を伝える活動も行っている。



下座四代

表 1. 指導している団体

|               |                                                              |                                                      |
|---------------|--------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 歌舞伎振付指導 10 団体 | 恵那市 5 団体                                                     | 山岡歌舞伎保存会 明智町歌舞伎保存会<br>串原歌舞伎保存会 上矢作歌舞伎保存会<br>飯地歌舞伎保存会 |
|               | 中津川市 3 団体                                                    | 坂下歌舞伎保存会 加子母歌舞伎保存会<br>安岐歌舞伎保存会                       |
|               | 東白川村 1 団体                                                    | 東白川村歌舞伎保存会                                           |
|               | 各務原市 1 団体                                                    | 村国座歌舞伎保存会                                            |
| 下座方を勤める 6 団体  | 東濃歌舞伎中津川保存会 常盤座歌舞伎保存会 蛭川歌舞伎保存会<br>東座歌舞伎保存会 恵那歌舞伎保存会 東野歌舞伎保存会 |                                                      |
| 舞踊指導 5 団体     | 坂下松扇会 加子母松扇会 山岡松扇会 明智松扇会 阿木松扇会                               |                                                      |
| 三味線指導 3 団体    | 恵南歌舞伎音楽教室 加子母三味線教室 坂下三味線教室                                   |                                                      |

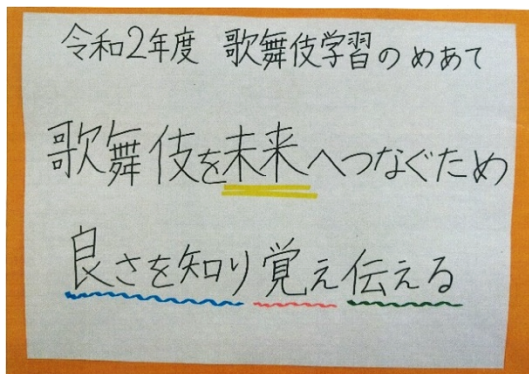


太功記十段目 光秀役の稽古風景

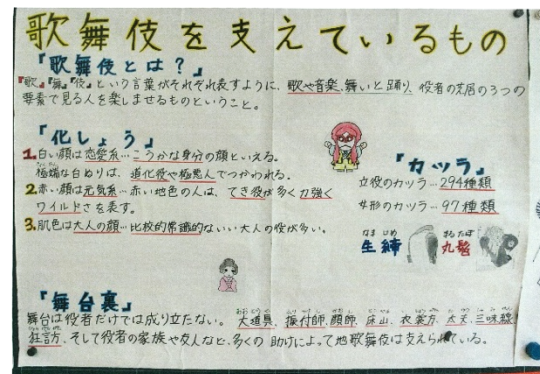


操役の稽古風景

私が地歌舞伎について一方的に話をするだけでなく、子どもたちが調べたことを発表したり、疑問に思うことを質問したりして、意見交換をする。



串原小学校 講座の事前学習



児童が作成した発表資料

少子高齢化により継承者が減少する中、地歌舞伎を保存継承するうえでは「子ども歌舞伎」は必要不可欠である。子どもたちは、難しいセリフを覚え、慣れない所作を身に付けようと、幼いなりに熱心に稽古に励んでいる。

私が子どもたちに指導するうえで、一番大事にしていることは礼儀作法である。まずはきちんと正座をして「お願いします」から始め、最後に「ありがとうございました」で終える。ほかにも道具を大切にすること、裏方など全ての協力者に感謝すること教える。引き続き子ども達には美しい日本の文化と歌舞伎の楽しさを伝えていきたい。



稽古開始前のごあいさつ

## 8. 地歌舞伎を新たな観光資源へ

今後、岐阜県もリニアの開通や道路改良により観光客増加も期待されている。自然と歴史文化が残る東濃地域は観光資源も豊富で、多くの観光客が訪れるのではないかな。今回の持続可能な観光というテーマから、地歌舞伎が観光資源となる可能性は十分にある。地域に残る芝居小屋での

公演は大変魅力的である。フランスとスペインで公演を行った際には歌舞伎や日本の文化への関心はとても高く、芝居を観て感動して涙を流している外国人もあり、日本の心が通じるのだなということを学んだ。今後、海外からの観光客数も回復すれば、外国人観光客が日本文化を見て体験して、楽しめるような催しを行ってみるのも良いのではないか。そのためには、後継者の育成と保存会員の確保だけでなく、何よりも地域全体での盛り上がりが不可欠である。

## 9. 終わりに

振付師である松本団女の使命としては、代々受け継がれてきた日本の伝統芸能である地歌舞伎の型をしっかりと守り、その楽しさを後世に伝えていくことである。



団升流一丁締め

舞台では一旦幕が締まった後に出演者が舞台に集まり、再び幕を開けてお客さんにお礼を述べる。最後に来場者の健康と多幸を祈念し、拍子木により団升流一丁締めをこのように行う。「よ一おつ、ちょんちょんちょん、ちょんちょんちょん、ちょんちょんちょん、よつ、ちょん。」